

令和7年度 高校生の作文コンクール

国土交通大臣賞

あの神社から はじまったこと

徳島県立阿南光高等学校 都市環境システム科

2年 四宮 渚咲



幼い頃、母の手に引かれて、山あい神社を訪れた記憶がある。苔むした石畳に二つの足音を落とすたび、風の音、木々のさざめき、遙か遠くからは、ウグイスの声も聞こえてくる。かえって際立つ静けさは、まるで時さえも歩みを緩めたようで、私はただ、その空間に母の体温と春の訪れだけを感じていた。

境内の奥深くには、社が静かにたたずんでいる。風雨に洗われた細かなひびも、穏やかな色合いに変化した木の表面も、人々が長い間、大切に見守ってきたという証のように感じられ、私の幼い目に強く焼き付けられた。同時にその光景は、「どうして、あの社は長い年月を経てもなお、美しくそこにあり続けられるのだろう」という小さな問いを、心に灯した。

高校生となった私は、徳島県西部に残る「うだつの町並み」を訪れた。連なる瓦屋根や木造の格子戸、隣屋の間の「うだつ」細い路地。一本の道に映るのは、歴史の重みだけではなく、当時の人々の暮らしをうかがうことのできる、穏やかな日常の風景だった。さらに、戸ごとの家屋には、陽の入り方や風の通り道、災害から人々を守る工夫が施されていることに気づいたとき、幼い日に感じたあの問いの答えに少し触れられたような気がした。「建てる」ということは、単に形を作ることだけではない。暮らしを支え、命を守り、未来と地続きである「今」を築く行いである。そしてその本質は、昔も今も、何一つ変わっていないのだと。

今、私は高校の授業で、建設の現場を支えるさまざまな知識や技術について学んでいる。

衛星やドローンを用いた測量、施工の手順や安

全管理、現場見学ではARを用いた空間の可視化や、IOTによってその全体がリアルタイムでつながる施工の様子など、日々目の当たりにしている。それは、幼い私が考えもしなかった未来の建設業の姿である。

現代の構造物は、最新のデジタル技術によって効率的に創られるため、無機質で冷たく感じられることもあるかもしれない。しかし、その背景には、長年の経験を積み重ねてきた職人たちの技術や知識がしっかりと根づいている。建築に携わってきた人々の数だけ、載せた想いが、目には見えないけれど確かに構造物に宿っているのだと確信する。建設するとは、目に見える構造物を、創ることに加え、人々の暮らしや想いが交差する場を作り上げていくことであり、誰かの今日を守り、その先も寄り添っていくことだと考える。

私は建設産業に、心から敬意を抱いている。それは古き社を守り、町並みを今につないできた職人たちすべてを支える、「誰かのために」というまっすぐな想いに触れているからに違いない。

いつか私も、建設業を通して、その想いをしっかり受け取り、次の世代へと手渡していける人間になりたい。汗にまみれた努力も、積み重ねた時間も、誰かの暮らしや心の拠りどころとして、静かに息づき続ける。そのように、未来へと続く一歩に、自らも関わっていききたい。その実現のためにも、私は心惹かれた構造物に自ら足を運び、その技術をこの目で直に感じ、さらに、新たな視点からも構造物をとらえ、誰かを支えられる技術者になりたい。その夢が実現するとき、あの日、神社の静けさに心惹かれていた、幼い日の私がきっと一番喜んでくれると思う。